

アジア・太平洋研究センター主催シンポジウム

日 時：2016年1月9日（土）

場 所：名古屋キャンパス R棟1階 会議室

テーマ：史料をめぐる「冒険」——近現代中国地域史研究の場合——

報告者：山本 英史（慶應義塾大学教授）

宮内 肇（立命館大学准教授）

佐藤 仁史（一橋大学教授）

司 会：宮原 佳昭（南山大学講師）



本シンポジウムの直接のきっかけは、佐藤氏主催の共同研究に宮内氏と宮原が招かれたことにある。佐藤氏は江南、宮内氏は広東、そして宮原は湖南を専門とし、各地域社会に関する比較研究を行った。そのなかで宮原は、佐藤・宮内両氏の研究スタイルすなわち史料収集のノウハウや史料の内容・読解のあり方に興味を持った。宮原の場合は省レベルの図書館や檔案館へ行く程度であるのに対し、両氏はさらに市・鎮レベルに足を踏み入れているためである。また、山本氏は明清史研究を専門とし、2014年には『史学雑誌』に「中国明清史料収集活動史」という文章を発表した。山本氏にとって両氏の史料収集のあり方は、日本における近現代中国地域史研究のなかでどのように位置づけられるのであろうか。

以上の問題関心に基き、本シンポジウムでは史料収集の方法、史料の内容や読解について3名の講演者に講演していただき、フロアの方々との質疑応答も交えて知見を共有した。

中国史料収集の過去と現状

山本 英史

1980年代以降の中国の政治・経済の変貌に伴い、史料閲覧環境もその影響を受けて大きく変化した。ここではその一端を紹介したい。

少なくとも1978年に日中平和友好条約が締結されるまでは特定の日本人以外は中国に行くことが許されなかった。そのため報告者が本格的な研究を始めた大学院生時代に見られる史料は東洋文庫をはじめとする日本国内にあるものに限られ、大陸には史料があるにもかかわらず見られないというもどかしい状況が存在した。

報告者が山東大学に留学したのは1982年だった。留学は報告者の中国認識に大きな影響を与えた。だが史料閲覧に関しては当時まだ著しく困難だった。山東大学での閲覧は少し可能だった。ただ文革の影響で史料の保存状況は劣悪を極めていた。北京図書館は当時から外国人でも紹介状さえあれば閲覧ができたが、総じて1980年代の中国において史料を見ることに多くの制約を伴っていた。

1990年代に入ると改革開放政策の定着とともに、史料閲覧にも“改革開放”が見られるようになった。報告者はその機会をとらえて1994年9月から7カ月間北京大学に滞在し、史料収集活動に従事した。北京図書館は紫竹院公園の北側の現在の場所に移転し、中国国家図書館と名を改めていた。目録も整備されていたため、閲覧がいっそう容易になったが、手続きが煩雑で、入室までに多くの時間を浪費したのが難点だった。他方、閲覧管理規則がまだ整っていなかった収蔵機関での閲覧は極めて寛容で、自由に写真撮影することができた。

紫禁城内の中国第一歴史檔案館は主として清朝中央政府の行政文書や地方官僚の上奏文などの原文書の整理が終わり一般公開していた。しかし、文書は膨大な量にのぼり、利用という点ではさながら茫漠たる海に泳ぎ出でるがごとくであった。

21世紀を迎えた史料閲覧環境の著しい変化は史料のデータベース化と地方檔案館における檔案（アーカイブ）の公開化であった。データベース化は台湾でいち早く実施された。例えば、台北の中央研究院歴史語言研究所は漢籍全文資料庫計画のもとに膨大な文書の電子化を進め、語彙検索による効率的利用を可能にした。

大陸では、各地の収蔵機関に暫定保管のまま未着手状態であった原文書が政府による檔案整理事業の通達によって地方各行政単位に檔案館が設けられた結果、整理分類され、一部がデータベース化された。これらの檔案の多くは20世紀のものであったものの、唯一無二の根本史料として近現代史研究の飛躍的發展に寄与した。

清代の地方檔案の大半は裁判・訴訟文書であり、中央檔案に比べてミクロな地域社会を描き出すことで貴重な情報を提供している。それらが保管された地方官署は戦乱

の中で焼き討ちに遭うことが多かったため、いまに伝えられるものは極めて少ないのが特徴である。しかし、今世紀に入り、幾種かの地方行政文書の存在が知られるようになり、檔案による清代地域社会史研究の可能性を拓いた。

最近5年の傾向としては、業者による史料の電子化が活発になったことが挙げられる。研究に資するUSBメモリーを購入することで、わざわざ収蔵機関にまで足を運ばずともその史料が閲覧できるようになった。また、清末民国期に刊行された膨大な雑誌群から有益な記事を検索することも容易になった。さらに『申報』など一部の新聞のデータベース化も従来史料を見出すのに費やしていた莫大な時間を著しく短縮した。

21世紀に入ってからのこのような変化が研究者に多大な恩恵をもたらしたことは事実である。だが、それはそれで問題がないわけではない。その第一は、情報の洪水による個人の処理能力の限界と檔案に何かと頼りがちになる「檔案依存症」が逆に研究者の史料閲覧活動を阻害しているのかもしれないという点である。第二は、檔案にはなお非公開なものが多いという点である。大陸でいう檔案とは従来「個人の履歴、思想、言動などについての記録」であり、事実、それらを保管する檔案館は戸籍管理や住民登録の役割を兼ねている。それゆえ、檔案とは個人情報であり、部外者がそれを勝手に閲覧することは許されない。近年、檔案館ではそのことを根拠に、とりわけ外国人の閲覧を厳しく制限している。檔案とはこのような性質を持つ史料である。したがって我々にはこれをいかに効率よく利用するか、さらに非公開のものをいかに閲覧するか、といった“戦略”が今後必要になってくる。

羊城の史料をめぐる「冒険」

——広東省立中山図書館所蔵の近代広東の新聞・雑誌について——

宮内 肇

この十数年来における中国近現代史研究の特徴のひとつとして、地域社会史への関心の高さがあげられる。その主旨は、広大かつ多様な中国社会の特質を総体的に論じることが難しいため、各地域・省・県あるいはそれ以下レベルの基層社会の動態をミクロな視点から分析することで、その地域社会の構造的特質を明らかにすることにある。そして、この地域社会史研究を可能にしたのが、地方の図書館や檔案館が所蔵する史料の整理と公開である。本報告では近代華南地域を研究対象にしている報告者が、広東省立中山図書館の地方新聞・雑誌の所蔵・公開の状況について紹介するとともに、その中で報告者が近年、関心を持っている僑刊雑誌の史料的価値についても論じたい。

広東省立中山図書館は、張之洞（1837〔道光十七〕年～1909〔宣統元〕年、字孝達、号香濤など、湖北省南皮人）が1888（光緒十四）年に「経世致用」な人材の育成を目的に設立した広雅書院の蔵書を、辛亥革命後に広東省政府が引継ぎ、1912年に広東省立図書館として開館したことに始まる。1919年には、清末民初期の広東紳士で蔵書家としても著名な梁鼎芬（1859〔咸豊九〕～1919年、字星海、号節庵、広東省番禺県人）の蔵書が寄贈された。このふたつのコレクションと清末以降、省内で発行された地方新聞・雑誌が同館の蔵書の特色であり、これらは同館特蔵部が管理している。

現在の特蔵部の蔵書は、上記の蔵書の他に、1990年代以降に省内の図書館・檔案館・大学図書館、さらに個人所有の近代広東の新聞・雑誌を加えたものから構成されている（一部、福建省・海南省・広西壮族自治区のものもある）。これらの蔵書のうち、新聞については2005年以前にはマイクロフィルム化されていたようであるが、基本的には非公開であった。2005年頃からデジタル化（画像化）が進められ、現在では特蔵部閲覧室（C区地下2階）に設けられたパソコンで閲覧できる。その数はおおよそ150紙、さらに「零散報紙」と分類された数日分しか残されていない新聞のコレクションを含めると200紙以上になる。ちなみに、2015年9月時点では、閲覧に紹介状や身分証の提示は不要である。画像の印刷サービスはないが、パソコンモニターに映し出された画像の撮影は自由である。

雑誌については、同館の公式サイトによれば、民国期に発行された968誌がマイクロフィルム化されているとあるが、デジタル化され公開されているものは多くない。現在のところ、OPAC（海外からのアクセス可）あるいは目録に記載されている雑誌のほとんどが、現物で閲覧可能である。また、持参のカメラでの撮影が可能で、1枚につき1人民元の料金が必要である。

さて、同館所蔵の雑誌の中で、特色あるものとして、僑刊雑誌があげられる。僑刊雑誌とは、華僑を多く輩出してきた広東省において、華僑・華人に郷里の情報を伝えるために、清末期から陸続と創刊された雑誌である。その中には抗日期と文革期の停刊をはさみ、現在でも発行を継続しているものもある。同館には1920年代半ばから抗日期直前までに発行された約110誌の僑刊雑誌が所蔵されている（清末期のものは多くない）。ただ、僑刊雑誌として分類されたり、目録があったりするわけではない。

続けて、なぜ僑刊雑誌が注目に値するのかを論じる。清末民初期には、広東省内の各地で新聞が創刊され、地域社会の動態は比較的とらえやすい。ところが、1920年代になると、地域発行の新聞が減り（存在したのかもしれないが、現存するものが極めて少ない）、国民党系の『広州民国日報』と『香港華字日報』が基本的な新聞史料となる。ただ、この二紙も広州を中心とした政治や軍閥の動向に関する記事が増えて地域欄が削られ、地域社会や基層社会の把握が難しくなる。そこで僑刊雑誌が各地の

基層社会（とりわけ珠江デルタ西部の五邑地域）を知る貴重な史料となる。

また、広東省を含む中国東南部地域の基層社会の特質として、しばしば宗族結合の強さが指摘されるが、僑刊雑誌は宗族を単位として創刊される場合が多い。近代広東における宗族結合が、いかなる伝統性を保持し、いかなる部分を変質させていったのかを考える上で、僑刊雑誌は有用な情報を提供する可能性がある。

現地に残された史料を収集・読解し、当時の社会を復元することが地域社会史の基本的作業であるが、その際に、その史料がなぜ残されたのかについても注意を払う必要があるだろう。広東省立中山図書館が僑刊雑誌を収集・所蔵していたこと自体が、広東地域社会の特質を示すものであるかもしれない。だとするならば、僑刊雑誌を読み解いていくことは、広東地域社会を読み解く正攻法とも言えるのではないだろうか。

* 追記：本年より『近代華僑報刊大系』（劉洪輝主編，広東経済出版社）が順次刊行される。この中にも広東省内で発行されたかなりの僑刊雑誌が含まれているようである。

フィールドで集める史料，フィールドで読む史料

佐藤 仁史

本報告では、種々の一次史料の発見・整理が急速に進展している中国近現代地域史研究について、報告者が行ってきたフィールドワークとの関連において論じた。近年における近現代地域史史料の整理において顕著なのが、『申報数拠庫』に代表される大型商用データベースの出現によって大量の清末・民国期の新聞・雑誌を容易に利用できるようになっていることである。また、省級や市級のみならず、県級（県級市を含む）の檔案館においても檔案の整理・公開が進んでいる。ところが、一次史料入手の利便性向上とともに「情報の大海」に溺れてしまう危険性ももたらされることとなった。こうした状況のもと、研究者はどのように史料と向かい合えばよいであろうか。本報告では報告者が1996年以来江南地方で行ってきた調査に基づいて議論を行った。

第1は、各地方所蔵機関や文史工作单位を丹念に回って史料収集をする必要性である。『晚清期刊全文数拠庫』『民国時期期刊全文数拠庫』などの新聞・雑誌データベースは、中国各地の図書館所蔵の史料をデジタル化したものである。ところが、地域によっては檔案館や博物館にも貴重な史料が所蔵されていることも少なくない。例えば、報告者が拙著（『近代中国の郷土意識』研文出版，2013年）で用いた『嚮報』は嘉定檔案館と嘉定博物館とにそれぞれ所蔵されており、データベースには収録されて

いない。常熟檔案館所蔵の『常熟日日報』と『常熟市郷報』という興味深い新聞も同様である。ところで、こうした史料を効率的に発見する手がかりは1980年以降に編纂された新編地方志の関連記事である。上述の『嚮報』を発見したきっかけは新編『嘉定県志』の記載であった。新編地方志の文献欄にはこれ以外に郷鎮志、郷土志、族譜、年譜、文集など当該地域の各種地方文献リストが収録されていることが多く、参考になる。もう一つ重要なのが、各地の地方志弁公室には編纂に際して採録した関連史料のファイルが保管されている場合が多く、その中には檔案も含まれていることである。もちろん史料の目利きは自らで行うべきであるが、収集された檔案をみることは特定の地域に関する檔案の状況を知る上で裨益するところが大きい。

第2は、フィールドワークによって民間に所蔵される史料を収集するという方法である。報告者は科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」（通称ニンプロ）の現地調査部門「海港をとりまく地域社会」に参加し、2007年8月から2010年10月にかけて钱塘江流域の九姓漁戸の末裔にインタビュー調査を実施した。その中で、彼らの多くが航運業に従事し、木柴、木炭、木材などの林産品を杭州などの大都市に運搬していたことを知り、問題の関心もこれら林産品生産を取り巻く社会関係に移った。その後、報告者を代表とする科研費基盤研究Bを得て、2013年以降は浙西山区社会の林産品の生産、山村の社会経済、自然資源の利用管理などに関するインタビュー調査などを行い、そこからローカルコモンズのあり方や環境史に関わる情報を収集している。こうした現地調査のなかでは思いかけず個人で所蔵される史料に遭遇することがある。報告者は山村の生産大隊で会計をつとめたことのあった老人2名から、1960年～1980年までの生産隊の各種帳簿や10万字におよぶ回想録とそのもととなった手帳（1972年～現在）を閲覧させていただくことができた。これらは集団化期～改革開放初期までの山村社会経済史料として極めて貴重であると思われる。ただこうした民間文献は現在では、厦門大学、上海交通大学、華東師範大学など各地の大学が熱心に収集しており、地の利や言語、現地との関係などのハンデを考えると、外国人研究者が自ら収集できる範囲は限定されるため、現地の大学が収集したものを利用するのが現実的であるかもしれない。

第3は、フィールドにおいて文献を読み込むことの重要性である。報告者のフィールドワークにおいては、文献史料にほとんど登場しないか、しても知識人の色眼鏡を通して描かれてきた民間信仰について調査を進めてきた。調査対象の一つに巫（シャーマン）がある。文献において彼らは、秩序を攪乱する存在、迷信を信じて近代文明を受け入れない存在、または民衆の貴重な財を浪費させる存在として描かれ、糾弾されてきた。中華人民共和国成立以降こうした存在は克服されたものとして見なされていきたが、改革開放政策施行後には巫に関する民俗は形を変えて復興し、ある現地協力者が「大雑把に言ってどの村にも少なくとも一人村には巫がいる」と述べる

ような状況が出現している。報告者の調査によって判明したのは、文献において指弾されるような負の側面以外に、彼らを必要とするクライアントの存在や、彼らを結節点とする女性の繋がりとそこにおけるヒーリングの側面があることである。また、実際に巫やその関連人物と接触することによって儀礼の細部や人々の繋がりを理解することは、文献の細部に対する理解を可能にするばかりでなく、文献が内包する色眼鏡の部分から距離を置き、新たな視角から文献を読み込むことを可能にするように思われる。

史料のデジタル化や地方所蔵機関における史料の公開が進展したことによって、中国近現代史研究においては新史料を発見・使用すること自体は難しいことではなくなっている。こうした状況のもと必要となっているのは、「史料の大海」に溺れないための明確な方針・手法を確立すること、史料を深く読み込むための新視角を獲得することである。逆説的ではあるが、一次史料の整理・公開が進み、現地に行かなくとも容易に各種文献が入手できる環境が整備されるにしたがい、実際に現地に赴いてフィールドワークを行い、「土地勘」を獲得することの重要性が却って高まっているのである。

(文責：宮原 佳昭)